濟州道フィルドワークの出張報告書

ソウル市立大学
李淵植(YI, YEONSIK)

□ 期間：　2016年9月4日～7日(3泊4日)
□ 場所：　濟州島（濟州大學校と抗日運動や4.3事件現場）
□ 参加者：蘭信三，外村外，福本拓，李洪章，李淵植(5人)
□ 日程及び調査活動

▣2016年9月4日(日曜日)：先発組の巡見準備と事務連絡

―13:35、ソウル金浦空港から出発(ASIANA AIR OZ8985便)
―15:00、濟州空港到着
―16:00、Hotel Regent Marine Blue チェックーイン
―18:00、先発組の李洪章さんと合流、全体の日程相談

▣2016年9月5日(月曜日)：後發組と合流、巡見開始

―11:00～13:00、後發組と濟州空港で合流
―13:00～19:00、午後巡見(案内：金昌厚, 元4.3事件研究所長)

1. 濟州抗日記念館

一学芸研究室訪問、濟州島の抗日運動史料調査.
一独立運動や植民地時期における濟州民の日本移駐状況等の展示観覧、濟州出身の独立運動家や社会運動家の遺跡観覧.

２．在日濟州民の碑石及び4.3事件の虐殺現場訪問

一　戦後、在日濟州民が自分の故郷に立てた碑石状況.

一　1948年4月3日から、濟州道で発生した韓国軍と警察による、良民虐殺の現場、追悼施設や追慕記念館(ノブンスン4.3記念館)の訪問、ドキュメンタリー観覧、4.3事件観覧史料調査.

一　韓国政府の謝罪と真相調査状況、生存者の証言史料調査.

▣ 2016年9月6日(火曜日) ： 濟州大學校(在日濟州人センター、在日濟州人室と博物館)、研究会の発表

1．在日濟州人センター訪問

一　センター長にお礼の挨拶と研究書の贈呈、在日濟州人室観覧と在日濟州人の関連史料調査及び収集

２．研究会

一　1970年代班の研究発表、今後、濟州道関連研究の展望と企画

1）外村大 ： 1970年代に於ける賣春觀光
- 日韓条約の締結に続いて賣春觀光のフレームを作つりあげた朴正熙政権への非難。
- 韓國の民主化運動と賣春觀光反對運動との関連性。
- 戰前の慰安婦に関する記憶と賣春觀光に対する記憶と認識の繋がり。

2) 李洪章 ： 在日の「祖國」志向から「定住」志向への転換
- 姜相中/ 一種の在日のイメージの生産と流布。
- 尹健次/ 前後 在日の精神史/ 本國或は歸國という思考の問題点。
- 実際のところ、在日同胞知識人と一般の在日同胞社会との認識に於ける相互作用。

3) 福本拓 ： 戦後、在日の移住と定住 ： 大阪の生野区の事例から
- 移動と定住の概念の見直し。
- 日本で家を確保するプロセスの実証的なアプローチ。
- 1980年に入ってから移動性の増加、共に韓国からのニューカマーの増加。
- 果たして、1970年代の段階で、‘定住’と言えるか。
- 1970年代のオイルショック、生野区の在日会社の倒産、勞動運動との関連性。
- ヨーロッパでも、オイルショック以後の工場閉鎖、すなわち1970年代に於ける人間の移動と社会運動への関心。
- 1965年はイギリス社会史研究の原点 ： 戦前と戦後のイギリス。戦後、豊かになった労働者をどう評価するのか．　これは、イギリスのoral　historyの原点でもある。高度經濟成長における労働組合の役割等。

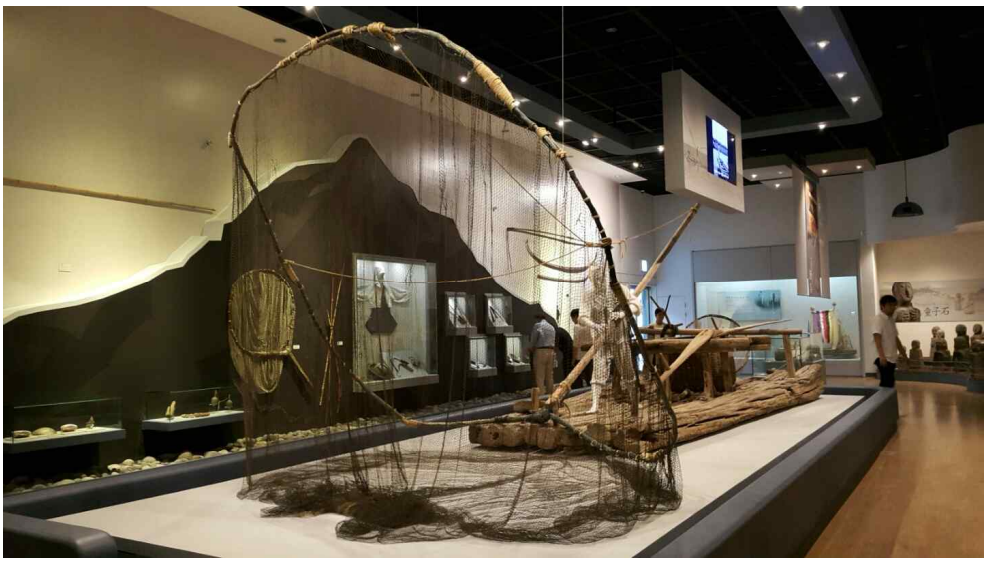
cf)「金大中拉致事件」の影響は？

4) 金泰植 ： 濟州道に於ける在日が立てた碑石の調査と研究
- ‘愛郷’に対する違和感 ： 総連や民団系の韓国に於ける逮捕や拷問という体験、反共政策というイデオロギーの犠牲、単に親戚という名分だけで逮捕された惨めな記憶にも関わらず、なぜ‘愛郷’という美化した認識を持ち出すのか。
- ‘return migration’
- もし、在日からもらった国際郵便の手紙等の史料はあるのか。これが残っていれば、濟州道と在日濟州道人との相互影響が立体的に究明可能なのか?
- 戦後、濟州道人に及ぼした在日濟州道人の影響 ： 移住のmotivation, 寄付？ 豊かなイメージ、人的なネットワーク?

5) 李淵植
- 1945年以後、濟州島人の（日本）再密航に関心
- 戦後、韓国社会における日本人キセン観光に対する認識と言説。
- 人の移動とお金や無形の遺産の移動との連携分析方法論とは？
- 1970年代に於ける在日同胞に対する韓国での主なイシュとイメージの流通。

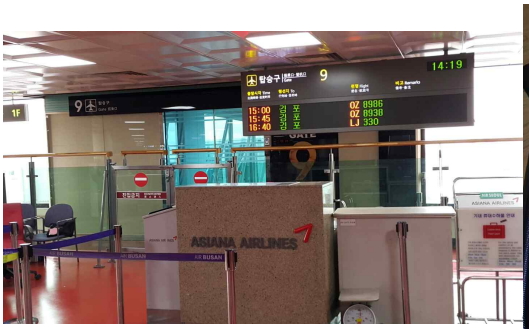
6）蘭信三 ： 今後の課題
- 2017年度の研究成果の整理方針について。
- 研究者の擴充を通じた研究テーマの立体化。
- 今後、新たなフレームを利用した濟州学(Jeju studies)の可能性や共同研究。
- 研究対象としての濟州島のメリットと研究成果の発信戦略。
- 濟州大學校との共同研究ネットワークの構築と深化戦略。

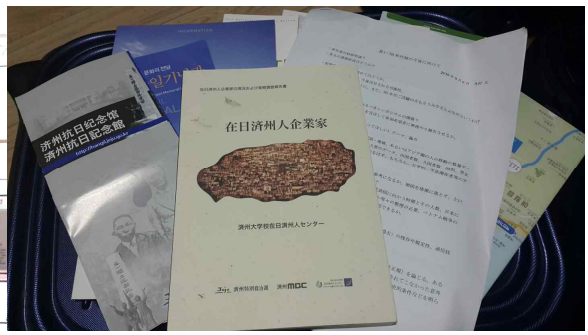
３．博物館観覧



一 濟州大學校付属博物館、韓国の国立大学の中では、地域性を標榜したユニックな博物館として有名、前近代から現在までの濟州道の歴史、風土、現像に関する膨大な遺物を展示している。

▣ 2016年9月7日(水曜日)：資料整理と帰り





―15:00　現地で収集した史料の整理、ホテルチェックアウト
　濟州空港-ソウル(Asiana Air, OZ 8986便)

▣ 現地調査の成果

1. 研究対象として濟州島の価値の発見

今まで、濟州道はナショナルヒストリーという枠組みのなかで議論されてきたが、国民国家を越える広域性やglobalizationによる眼に見える変化が激しい地域である以上、もっと柔軟な学問的なアプローチにより、ダイナミックな研究成果がだせると実感した。

２．戦前、戦後、そして現在を包括する新たな議論の必要性

これからは、ある時期を単絶的に研究する方法から抜け出し、戦前と戦後の連続性や、現在のあり方まで包括できるもっとマクロな研究方法に対する議論が必要だと感じた。

３．比較研究の必要性

濟州道は、沖縄や台湾と類似な戦後体験を持っている以上、上記の地域との比較研究をもっと深めて、中国、韓国、日本それぞれの戦後と境界の島という地域性をより立体的に比較する必要がある。今回の調査がその基礎になると信じる。